

日系アメリカ人の軌跡を訪ねて

愛知教育大学 非常勤講師
三輪 昭子

1. 東海岸から西海岸への視線

2001年は2年次の現地研修で、1940年代のニュージャージー州に所在したシーブルック・ファーム（Seabrook Farm）に関する資料と出会った私は、さらに同年の秋、西海岸へ渡った日本人についての新たな情報を日本で得た。その情報というのは、私の現在住んでいる地域がアメリカ移民を多く送り出していたという事実であった¹⁾。

日本からアメリカへ渡った人たちは、カリフォルニア州で農業に従事した者が多かったという²⁾。その中で、愛知県、特に海部郡の地域の出身者たちは州都のサクラメントからスタクトンにかけての地域に集住、農業に従事した。その中でもウォールナツグローブという街は愛知県人が集住したこともあり、「北米の愛知村」と称されるほどであった。そのような情報を手にし、2002年には西海岸地域（サンフランシスコ、サクラメント、ロサンゼルス）を訪れる日程であることを知り、再度このプロジェクトの現地研修に参加する決意をした。ロサンゼルスには全米日系人博物館があり、私の知らなかった日系人の体験、殊に「シーブルック・ファーム」にやってきた日系人が体験した強制収容所に関わる謎の部分が少しばかりは解明できるのではないかと思われたからである。シーブルックにやってきた日系人の多くは、たとえ尋ねられても、自分の子どもにすら何も話さず、収容所に関する体験は彼らの心の中に閉じ込められた。

強制収容所に関する事実は残されているので、それを手がかりに当時の日系人について考え、彼らの心のうちを想像してみようと思ったのである。

私の研修参加はサンフランシスコから始まった。

2. サンフランシスコでの「視線」のありか

(1) 特定の民族に集中した「視線」 - イスラム系と日系の受難

「視線」という言葉に注意を払うようになったのは、昨年9月11日に起こった同時多発テロ事件以降であった。テロを起こしたのがイスラム系の人間であったがために、イスラム系アメリカ人が受けた視線には耐えがたいものがあったはずである。

例えば、世界貿易センタービルに2機の飛行機が衝突したというニュースで、現場に駆けつけたニューヨーク市消防局の救急医療隊員にもイスラム系アメリカ人が所属していた。救援所で負傷者に応急手当をしつつも、自分の浅黒い顔と、消防局のポロシャツに書かれたイスラム系の名前に注がれた視線に、気づかざるを得なかった者がいた。しかし、後ほど、彼はそう感じたことを恥じたという³⁾。

その後、新聞やニュース雑誌、CNNニュースの電子版等の中で、イスラム系アメリカ人に対する怒りの矛先が人種偏見によるヘイト・クライム（嫌悪犯罪）に発展した記事が登場するようになった。ヘイト・クライムとして起きた暴行、殺人、脅迫等はかなりの数に昇ったという。テロ事件の起こったニューヨーク市ばかりでなく、ミシガン州デトロイト市、テキサス州ダラス市、カリフォルニア州ロサンゼルス市でも被害報告が出された⁴⁾。

また、結果的にテロとは無関係と判断されても、イスラム系という理由だけで航空会社から搭乗を拒否されたり、ほとんど英語を話さない怪しい人物としてバスの運転手に通報